

p. 75, Pl. XIX, Fig. 7, 8, 9 に当時キオデクトン一種 *Chiodecton* sp. と仮称したものと同一であるのを見て其奇遇に驚いた。尚筆者は最近 *Haematomma* の一新品(伊延敏行氏送品)を研究中で三好博士採集, Müller Arg. の鑑定した標本をジュネーブのボアシエー腊葉館へ借用申込中であつたので黒川君との間に邦産 *Haematomma* 属の再審を一応筆者が行う協定が整った。其結果は上記欧文テキストに綴られてある。

尚今回の給論に至る迄筆者のとつた行動の若干を記録するのも無駄ではないと思う。扱 *Haematomma* 属の検討に当り重要な点は本属中世界共通種と考えられる *H. puniceum* (Ach.) Mass. の正しき認識である。本研究の初めに筆者が本種の標本なりと信じて所有して居たものは Zahlbr.-Reding. Lichenes rariores no. 225. Florida. leg. C.C. Plitt 及 Räsänen (植研 16 卷 89 頁) の鑑定した安田 no. 551. *H. puniceum* (Ach.) Vain. v. *esorediatum* Vain (東京大学腊葉室所蔵) の 2 個で此外に上記のものと筆者が同定した台湾及内国産標本 4 箇であつて何れも葉体は K- 或は + 淡黄でアトラノリンの含量によるものであり, P は葉体並に果殻の髓も共に - である。又果盤の赤色素は K で濃紫色から血赤色乃至淡紅色と或程度差違があるが恐らく赤色素の含量の差ではあるまいか。胞子は細長で蚯蚓状に湾曲し先端稍丸味を有し他端尾状に細まる。大き 50-80 × 3-5 μ で区割の数は 5 以上 10 数個で正確に決定できない。そこで先人が日本産の *H. puniceum* と鑑定した標本を再検討して見ると Müller Arg. の鑑定で三好送品日光 no. 238 の *Lecania* (s. *Haematomma*) *punicea* 及日光 no. 275 の *L.* (s. *Haematomma*) *punicea* v. *rufopallens* (Vain.) と云はれるものは何れも葉体又は少なくとも果殻の髓が P+ 黄色で *puniceum* ではなく *H. Fauriei* であり又 Zahlbruckner が鑑定した筆者の送品武甲 no. 504. *H. puniceum* (植物学雑誌 41 卷 345 頁, 1927) も P+ であるから *H. Fauriei* である。従て本邦産 *H. puniceum* としての本邦最初の記録は安田標本 no. 551, 豊後, 日田町月隈山, 1922. leg. Nakayama の Räsänen による鑑定である。かくの如き状況の下で *H. puniceum* を認識することは可なり危険性を伴ふものと判断し, Uppsala の Dr. Santesson 氏の厚意で世界各地産の *H. puniceum* と称するもの 53 個の標本を借用して外形的並に簡単な呈色反応で一応是等を広義の群と考へ *Haematomma puniceum* (Ach.) Mass. sensu latiore として取扱ひ細かき差違につきては已に着手しつつある別の報文で発表せんとするものである。

□ C.E.B. Bonner: **Index Hepaticarum.** Pars IV: *Ceratolejeunea* to *Cystolejeunea*. Pp. 637-926. Dec. 1963. Published by J. Cramer, 694, Weinheim (Germany). 昨年末に Index Hepaticarum の第 4 分冊が出た。第 1 分冊は大属 *Plagiochila* のみを取扱った。第 2 からこの第 4 分冊迄通し 926 頁迄が第 1 巻となる。第 3 分冊迄は既に本誌で紹介したので重複をさけるため説明を省き、最近 Jena の Dr. R. Grolle が指摘した問題点を引用するに止めたい。ABC 順に並べた各 taxon につき "Type" の項目があるが、今迄タイプがはっきりしていなかった種も、ここでタイプを指定したことになるのではないか? 著者は序言の 4a で lectotype 指定の意図のないことを強調してはいるけれども——。(服部新佐)